

[担当教員(前半)]
各研究室指導教員

1. 課題趣旨

神戸のウォーターフロントは緑豊かな六甲山系と大阪湾の青い海に挟まれた日本を代表する港町である。開港以来、もの、人、文化のゲートウェイとしての役割を果たし、神戸独自の都市的な文化を醸成してきた。

しかし、近年港湾部の工業や物流の衰退に伴いウォーターフロントの未来へのビジョンが問われている。ウォーターフロントの再生は世界的な課題であり、アメリカ・シアトル市においても老朽化の進んだ高架高速道路の地下化及び港湾防波堤・インフラの更新、そしてダウンタウンと水辺をつなげて国際的な都市の競争力を高めるための取り組みが今まさに始まっている。

今回の課題「神戸ウォーターフロント」は2つの面的な敷地を対象に、ウォーターフロントのビジョンを環境、文化、生態、安全、健康、アクティビティなど包括的な視点から考えることとする。既存の都心エリアの魅力や既存の公共空間や公園などランドスケープ資源を活用しつつ、道路や港湾など土木施設のリノベーション、そして海と都市をつなげて世界的な神戸ウォーターフロントを構想するための計画を提案してほしい。

2. 敷地(別紙地図)

計画地区は、別紙地図に示す神戸市のウォーターフロント及びその周辺地域を含む A、B のうちいずれか一つを選択する。地区特性、土地利用、ウォーターフロントへのアクセス等を考慮すること。

■A 地区：都心ウォーターフロント地区

- A1：みなとのもり公園2期、第2突堤+第3突堤、波止場町1丁目
- A2：メリケンパーク、ポートタワー周辺
- A3：川崎重工跡地(想定)

■B 地区：兵庫運河ウォーターフロント地区

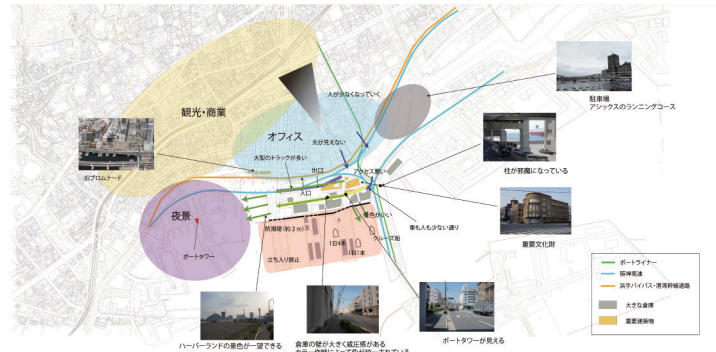
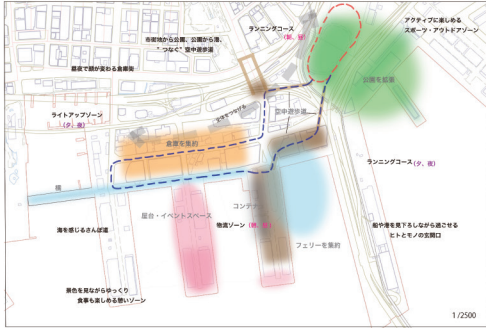
- B1：新川運河
- B2：兵庫運河
- B3：荻藻島運河



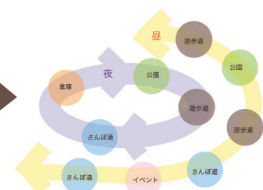
つながり、集う、憩いのウォーターフロント

大西研究室、近藤研究室、山邊研究室

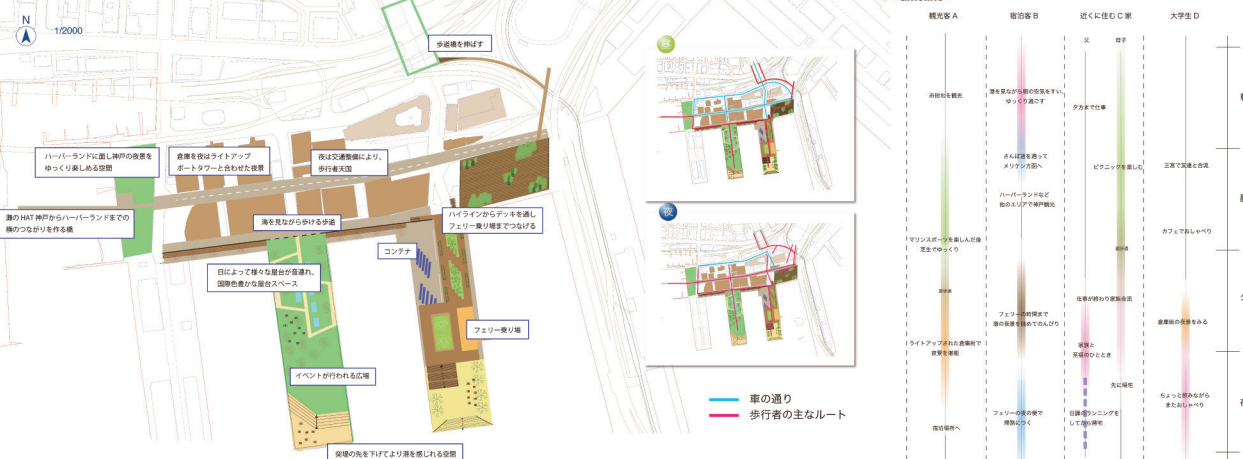
plan (outline)



odigram



timeline



[担当教員(後半)]

ランドスケープ設計課題

長濱伸貴(神戸芸術工科大学准教授) 福岡孝則(特命准教授)

[Teaching Assistant]

小川亜希穂(A63) 森川潤(A63)

ランドスケープ計画課題

北後明彦(教授) 大西一嘉(准教授) 近藤民代(准教授)

栗山尚子(助教) 山口秀文(助教)

■課題趣旨・目標

前半で取り組んだアーバンデザイン課題は都心部のウォーターフロント地区と兵庫運河ウォーターフロント地区を対象にビジョンを環境、文化、生態、安全、健康、アクティビティなど包括的な視点からの構想することを旨とした課題であった。後半のランドスケープ設計課題は未来の地域の拠点として都市の活力を牽引するオープンスペースのデザインである。建物・道路・公園などのインフラの更新期を迎えた敷地、従前の機能が著しく低下した水辺の工業跡地や突堤、水辺へ点在する既存の河川や広場、公園などを対象として神戸都心部と兵庫運河ウォーターフロント地域再生の具体的な方法とデザイン提案にランドスケープの発想から取り組む。

■課題の進め方・ポイント

- ・前半課題のマスタープランの中で拠点となるオープンスペース(具体的には広場、公園、道路、歩行者空間、土木施設、埠頭、工業跡地、公開空地など)を選定する。グループの中で選択した拠点オープンスペースを組み合わせることで都市にどのような活力をもたらし、変化を起こすか目標を設定する。
- ・都心部とウォーターフロントの関係性を再考し、都市における新しい水辺の意味を考える。
- ・拠点とする対象敷地の周辺1街区程度(拠点エリア)も拡大した対象敷地として捉えデザインコンセプトを構想する
- ・敷地における環境条件などの直接的なコンテキストと、経済・文化・社会・生態などより広い概念のコンテキストの双方を理解し、設計を進める。

- ・対象敷地(拠点)と周辺エリア(拠点エリア)においてどのようなランドスケープ操作が都市活性化のツボとなるのかを敷地周辺の操作も考えつつ設計を進める。
- ・面的な敷地における地形操作、植栽・水・小構造物等ランドスケープから発想する敷地デザインを学ぶ
- ・プログラムやアクティビティを構想し、都市内の回遊性を高めるだけでなく多様な利用を誘発するデザインの仕組みをつくる。
- ・工業跡地や道路空間・駐車場など機能を低下させた面的な敷地を読み替え、ランドスケープ的に再生する手法を開発する。
- ・都市スケール〜身体スケールにおけるデザイン操作を行い、スケールの伸縮と操作の有効性を立面・断面・詳細などの検討を通して空間の設計へとつなげる。
- ・個別の設計を進めながら課題の大きな目標に対してグループ・メンバーの個別の敷地デザインがどのように全体に作用しているか、確認しながら設計を進めること。

[ゲスト講評者]

嘉名光市(都市計画家、大阪市立大学准教授)

宮原克昇(ランドスケープアーキテクト、鳳コンサルタント株式会社)

田原潤(神戸市企画調整局総合計画課)

[OB 講評者]

杉野卓史(安井建築設計事務所、AO42)

中島千晶(MBA Candidate at UC Berkeley Haas School of Business AC9)

■学外展覧会への出展

ミズベリング世界会議 IN OSAKA

塚越仁貴、後藤沙羅、馬場智美



京都ランドスケープデザイン展 2015

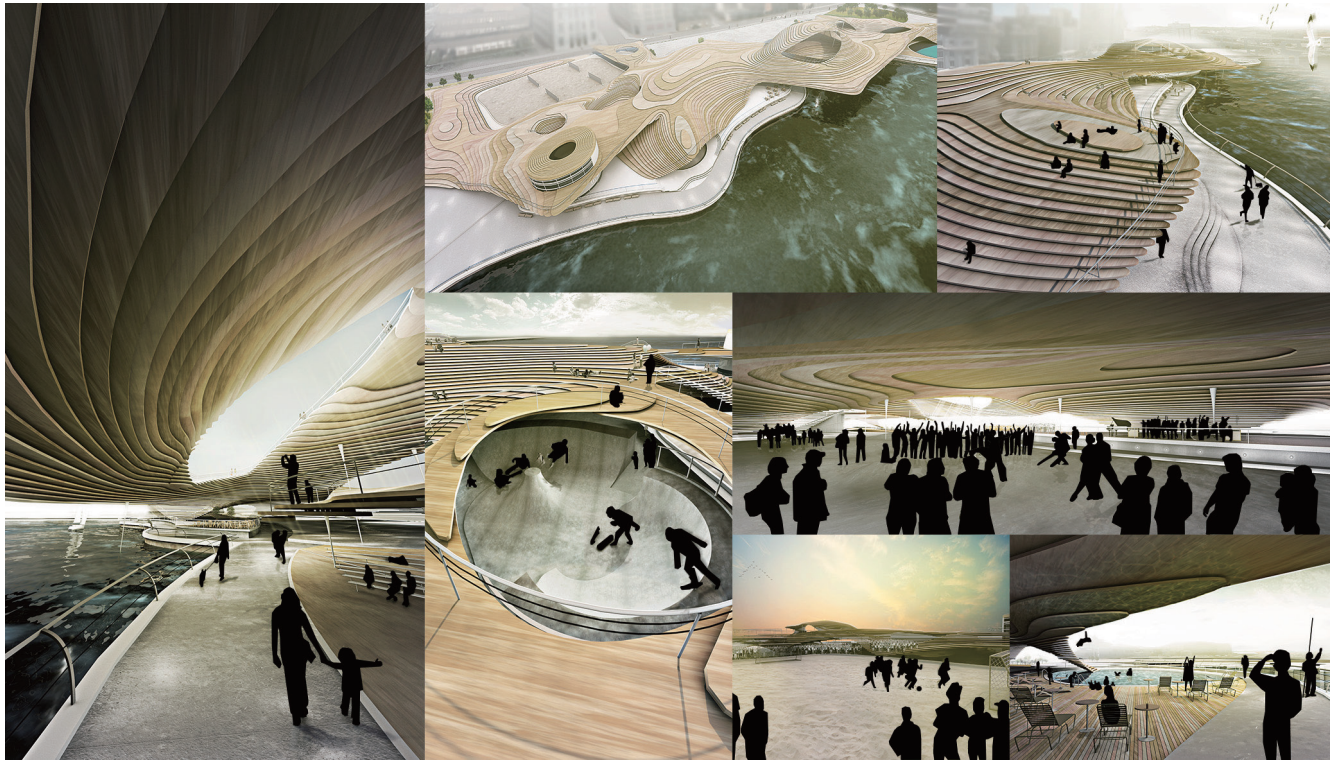
塚越仁貴、後藤沙羅、坂口大賀、仲川絵理



海へ - 屋外劇場を内包する立体的地形の提案

塚越仁貴

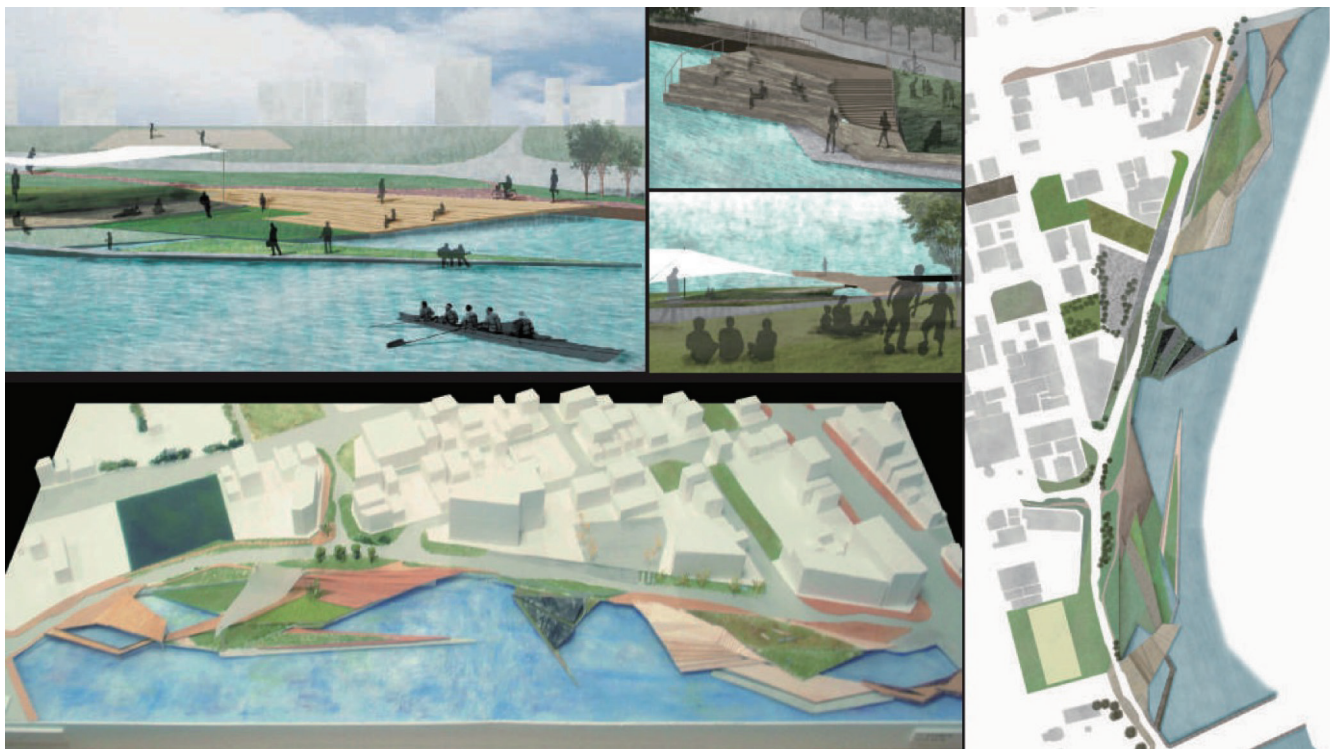
滞留の生まれにくい直線的、平面的な海岸線に3次元的な移動、空間体験を与える立体的地形を創出する。
国際・芸術都市を目指す神戸の新たな拠点として、ホール、アートギャラリー、スポーツ施設、震災メモリアルなどを内包する。



まちの結び目

後藤沙羅

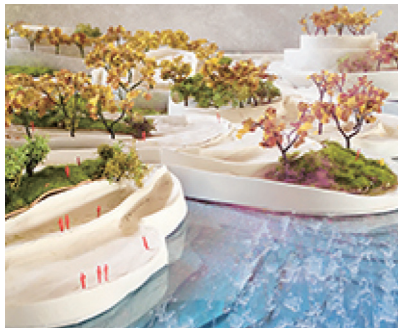
様々に変わりゆく新川運河周辺。人の流れや環境の変化を汲み取り、場所ごとに応じた軸線、形状、水との遠近を導出。視線の変化を利用し、通りぬける人々をあらゆるアクティビティに巻き込む新たなコミュニティ形成の場として再編。まちをここで、つなぎとめる。



Escape to the Oasis - 水辺をランチバスがゆく

馬場智美

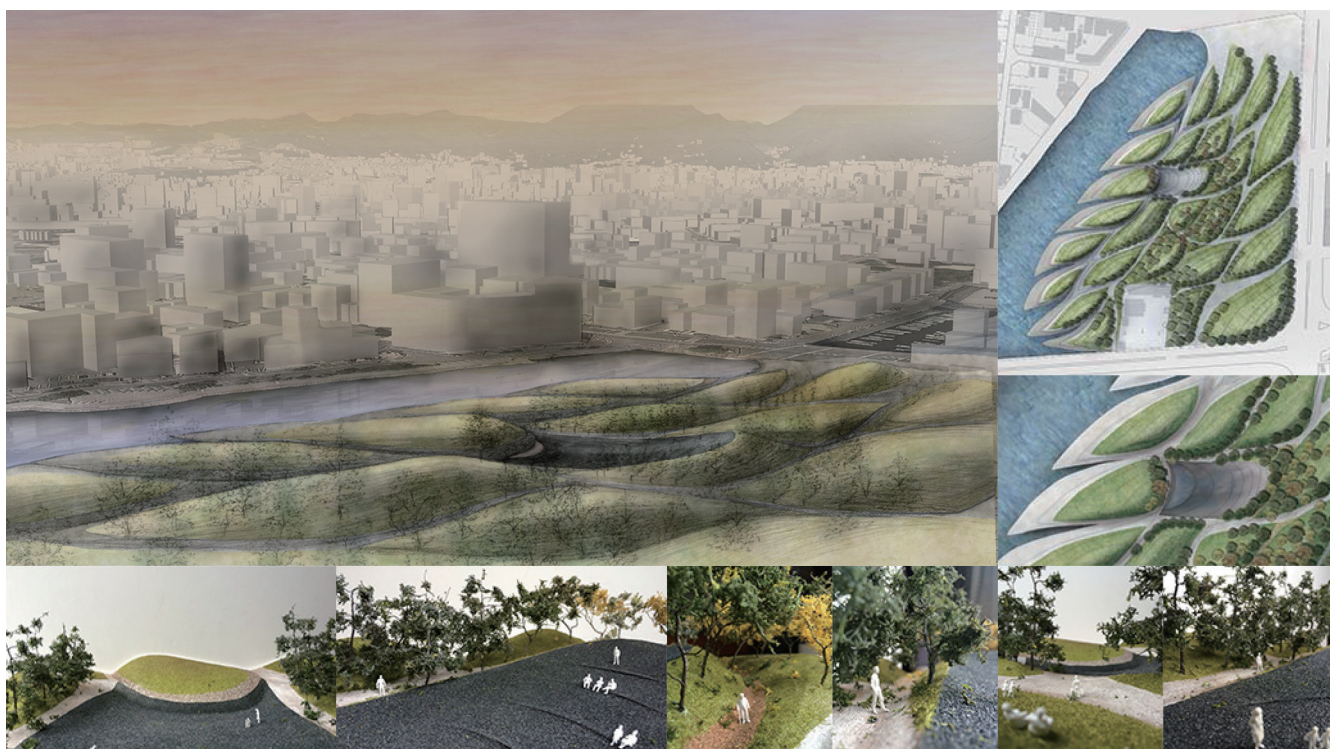
旧居留地周辺のオフィス街で働く人々が日常的に利用する非日常的なオープンスペース。お昼時になると敷地の中心を通るケヤキ並木に停まるランチバスに人が集まり、流線を描く躯体に腰掛ける。3つのVIEW POINTから異なる眺めを楽しむ。



Kobe Memorial Park of War

仲川絵理

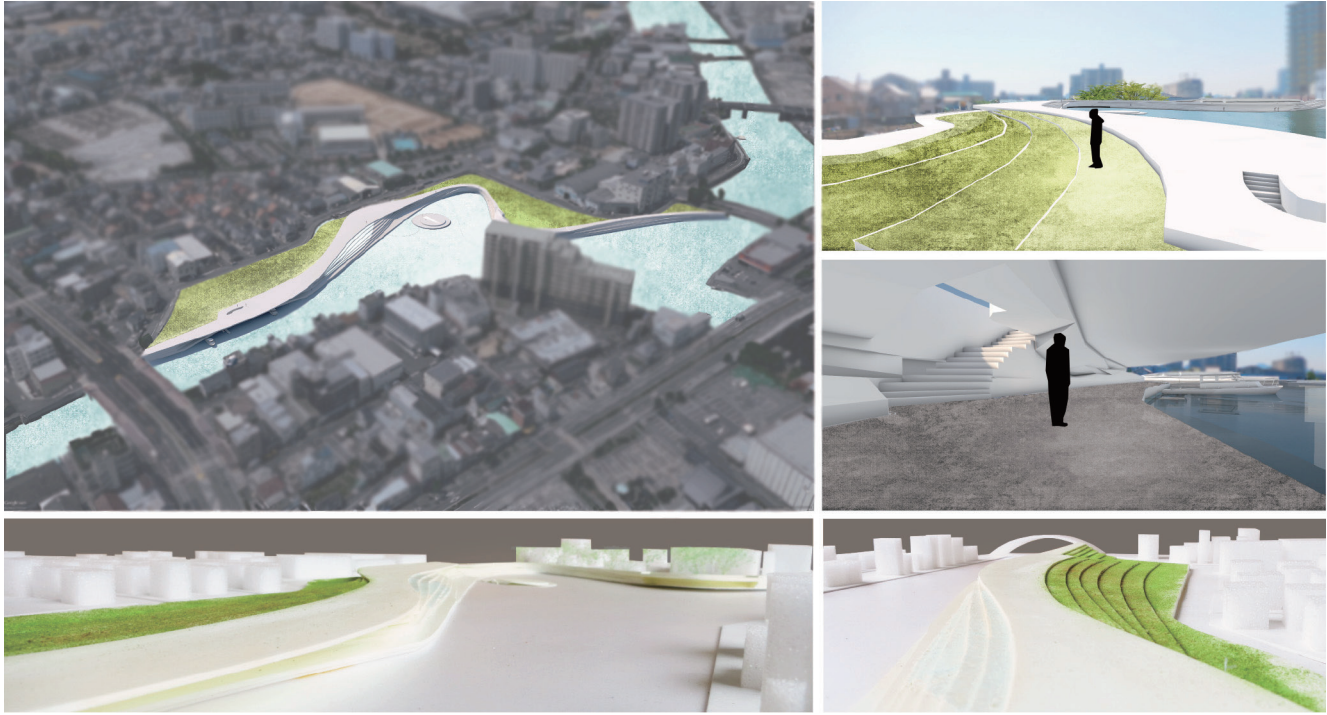
空襲で炎に巻かれた人々が運河の水を求め大輪田橋に集まった、という凄惨な歴史を持つ兵庫運河。この地に、悼むための場所ではなく、市民の日常に寄り添いながら朽ちること無くこの街の記憶を守り続ける、新たなメモリアルパークの在り方を提案する。



causeway

坂口大賀

兵庫港から伸びる新川運河。かつて交易を支えた運河は、港の利用の減少とともに役割を失い、周辺を取り囲む単一機能の防潮堤により住民の生活との関係が希薄になった。運河周辺に減災機能を持つオープンスペースを計画し、海とまちの関係を再考する。



日常を取り戻す時

増成唯

－もしものとき－に備えた防波堤によって、日常の動作や視線が奪われてしまってもよいのだろうか？この地は、運河に最も近くて、遠い。防波堤の代わりとなるものをつくることで、人々は運河へと足を運び、運河が生活に溶け込んだ暮らしとなる。

